

秋保

秋保氏の城館

里山の平場は曲輪の跡
街道のすぐそばに残る土塁
ふだんの街歩きや山歩きも、
歴史を知ればもっと面白い。

訪れてみたい秋保
二口街道ツアー 62

No.49

① 桶山城（秋保氏総家）

秋保町長袋字亀ヶ森山

秋保温泉から二口街道を西に向って進むと、境野付近から見えて左手に、山頂が平場でお椀を伏せたような独特の形をした山がある。ここが「桶山城」である。東西に長い秋保地区の中心部にあつて、今なお秋保の人々に誇りの山城があつて特別の山で、深い歴史のある場所として意識されている。

名取川と本砂金川、大柴沢に囲まれ連山から平地に飛び出した独峰で、急峻な斜面と深い深谷を取り巻く。自然地形と人工造物を加味した強固な山城の様相を備えている。平家落人を由縁として勃興した中世秋保氏が、秋保五ヶ村をまこと支配するための一大拠点として築いた秋保郷さつての地である。中世以降地区内に数多い諸館と巧みに連携を保ち、一族一派が一丸となつて秋保の守護を司つたものと思われる。

秋保氏5代基盛のときに築城された難攻不落を誇つたが、伊達氏に属する前15代盛房の時に名取大曲の長井氏の奇襲を受け、城を奪われるという事態に見舞われる。しかし、その後布かれた長井氏の詔政に村民が反旗を翻し、山形に逃れた盛房を呼び喚して、村民とともにこの城を奪回し、もつて長井氏を滅ぼしたという逸話が残っている。

頂上部は約一反歩（約100m）ほりの平場（二の丸）。その北側に一段高い平場で頂上となる本丸があり、眺望が絶景を極め、山麓の石神、国久、竹ノ内はもとより、湯岡から森安までの各集落を望むことが出来る。名取川を挟んで境野館や境野東館、東の羽山（大倉山）と対峙し、更には遠く馬場の土館や豊後館も一望でき、中世武士の胸中を味つていことが出来る。

② 長館（秋保氏本家）

秋保町長袋館

秋保小学校近くの丁字路を川崎町方面に進み、まもなく左折して細い市道沿いの家々が秋保本家の子孫が住む「館」集落である。この東方先300mの長さに亘つて突出した古穴台地に、戦国時代以降、桶山城を有するの秋保氏の「明治」となるまで長く秋保郷を治めるため居館として築いたのが長館である。

名取川と瀬川が合流するこの場所は、登攀を妨げる断崖絶壁の自然の要害となつていて、袋状の地形をなしていることから、「長谷」という地名の語源になつたと云われている。集落の入口から居館までは、折形を備えた身長の土を越える4か所の土壇が築かれ、とりわけ先端部手前の「四の土手」は大規模で、頂部の幅が10mに達し、秋保氏の御屋敷とする戦国期の特徴を備えている。

二口街道を挟んだ北側には、分家境野氏の「境野館」があり、いざ有事となれば長館も桶山城の前衛地へと一変し、境野氏と連携しつ、大旗山から「境野山城」「境野館」「長館」として「桶山城」と一体となつて二口街道の守備を効果的に機能する構造となつていたことがわかる。

慶長8年伊達氏の仙台開府に伴い館主秋保氏18代直盛は、蔵王町小村崎村へ処替えとなり、長館は廃となるが、藩政時代中期、仙台藩の奉行職を務めた2代氏盛のときに再び長館を居館とすることが認められる。その際に中世を再現したような家中集落「館」と併せて二口街道の宿場集落「登坂町」が整備され、現在に至っている。

入口から長館跡への道すがら、折形や土壇の跡、秋保本家中の子孫の家々が現存し、往時の雰囲気を感じ出している。館には、樹齢約500年の大イチョウと樹齢約300年に伝わる大ヒバがそびえ、長い歴史を見守っている。

③ 上館（馬場秋保氏）

秋保町馬場字北山

馬場小学校の北側、北山と称される山並みの東端、芋生川手前に突き出た丘陵に築かれたのが、秋保氏15代盛房の分家、弟盛義の居館「上館」である。

この場所は馬場と新川を結ぶ「芋生峠道」と「馬場と白沢を結ぶ「大雲寺峠道」の往還の起点にある。ここは二口街道と交わる極めて重要な馬場の咽喉部ともいえる場所。周囲は傾斜の激しい自然の要害となつていて、三反歩約300mほどの平場の周囲には、土壇や空堀が巡らされ、今は植林で薄暗いが、樹がなければ馬場の町並みにみえぬとより、土壇から境野に至る各集落や桶山城ほか各館の眺望が利くほか、北側は眼下に芋生峠を見下ろすことができるなど外敵に備えた構造となつていて、

本家の盛房は、桶山城陥落という忌まわしい出来事に遭い、馬場の村強化を図るため、桶山城奪還後に、弟盛義に馬場を移すまで使用された。

今は愛宕神社として祀られ、鳥居の先には館跡に登る苦むした石段が、神社の参道として整備されているためとも登りやすい。注意して歩くと急斜面と平場が交互に見え、3層の土壇の跡と分かれ、戦国期の物々しさを伝えている。

④ 豊後館（馬場秋保氏）

秋保町馬場字町南

馬場駅集の入り口、小滝沢の袂から南に入り、宮城県観光100選にも選ばれたことのある名取の景勝地「白岩」に向かつて進むと、左手東方に向けて広大な平場となる。大標の袂に100mにおよぶ見上げるほどの土塁があり、これを含み東側が豊後館で、北に位置する「上館」に代わつて永禄年間（1558年-1570年）に馬場秋保氏3代（定重）によって築館された。

秋保川と小滝沢が合流する断崖絶壁の内側、一反歩（約1000m）ほどの古穴台地にあり、秋保郷の他の城館よりも強固な作りとなつていて。圧巻は土塁の南端で、石積みの虎口が折形に整備された遺構が残っているほか、名取川の断崖との間を空堀、土塁、土垣積み・堀割を施し、館内に入るには幾層もの防御と監視体制をめぐり抜けなければならず、もつて二口街道随一の城館の様相を呈している。

馬場秋保氏は、定重の代に本家秋保氏とともに伊達氏に従属しているが、政宗の代となつて境界領有の主導権を巡つて最上氏と交戦が増し、二口峠に近い野では度々争いが起きていて。伝承では、最上勢が野尻から迂回し、本砂金筋原を越えて豊後館対岸の「白岩」に、館に奇襲をかけ、定重の妻子を人質に陥落を企てるが、これをなみと撃破している。また最上氏と内通した深谷（石巻市桃生）領主、長月鑑斎が、その行とともに密かに二口街道を西へ逃し、ようとした際、政宗の命によりこれを誅殺するといふ出来事は、豊後館を舞台とした代表的逸話である。

館主定重は政宗から絶大な信頼を受け、数々の功績をたたえられたとともに、この館の普請にあつては、秋保郷の巨匠は総力をこめて力を提供し、いざ有事の際はこの館へ集結して、定重の指揮に従うようにという命令を受けている。このことから当時の館が、単なる馬場領内、秋保領内支配のための居館に止まらず、最上領との境界防衛上の軍事拠点という意義を持っていたことがわかる。

しかし伊達氏の仙台開府に伴い、秋保郷は藩の馬場地となり、定重は蔵王町円田村へ処替え、豊後館は築館後わずか40年余りで廃館となる。

以前は豊後館とした杉林だったが、近年伐採され、封印が解けたように開けて、立て看板などもあり歩き易くなつていて、かつての曲輪の中に身を置くと400年以上の時を越えて武士（もものさ）の息吹きを感じられる。

⑤ 境野館・⑥ 山城（境野氏）

秋保町長袋字二の輪山

戦国時代末期、永禄年間に秋保氏から分家した境野氏の居館で、二口街道の守備強化のため築館された。境野地区の西端、名取川の支流瀬沢川が二に分岐する内側の突出丘陵の一反歩（約1000m）ほどの平場にあり、自然峽谷の断崖を利用した要害となつていて。東側の瀬沢川に渡された長さ10mほどの狭い土橋が唯一の出入口とされ、戦国期の居館らしい作りとなつていて。居館の手前は深さ4mほどの巨大な空堀が敷かれ、館跡は周囲から見ると小高い丘のような地形になっている。その西側には一段下がって「西の窪」と称される一歩（約1000m）ほどの広大な谷地の平坦部があり、湧水地や家中と思われる屋敷跡の痕跡が残されている。また空堀越しの北側の壇上には中館と云われる補助的な機能をもった屋敷跡の平場もあり、そこから背後の大旗山の山城へとつながる構造となっている。

館の南側からは瀬沢川越しに二口街道を見下ろすことができ、本家秋保氏の長館と連携し、有事の備えとしたことがわかる。慶長8年仙台開府に伴う処替えまで約60年間用いられた。

境野館の山城は、大旗山の尾根を利用した3層の守備で、有事の際は境野館の詰館として、籠城を意図しながら、防戦を展開するという構成である。やけ山の平場の手前には、50mほどの土壇が二重に巡らされて、この辺り、帯を結ぶ「二の輪山」とも呼ばれている。また大旗山は「大畑山」とも言われ、山頂の背後に畑があったと伝えられており、畑や水場を備えた、長期の籠城にも耐えうるものだったと云う。

館跡に至る山道があり30分程度登ることができるが、一部荒れているところもあるで、道をはずれは十分な注意が必要。籠城という戦況を想像しながら登ると、その境地にしひれるような緊張感が漂う。

⑦ 境野東館（境野氏）

秋保町境野字森峯山

境野地区北側の連山から続く尾根が南へ突出し丘頂部となつていて「森峯山」に位置し、総延長300mほどになる細長い地形の西側の小高い平場にある。杉の沢の断崖で背後を守りつ、旧二口街道と愛子方面を結ぶ板風峠道を監視できる丘陵上に位置する。

秋保氏から分家した境野氏が、居館「境野館」整備後に板風峠道方面から侵入する外敵防御等有事に備え設置したものと云われ、井戸や古墓など境野家臣やその使用人らが居を構えた痕跡を残している。

標高がそれほど高くない丘陵地でありながら眺めが良く、集落全体の景観はもとより、大東岳や糸岳、桶山や羽山（大倉山）、遠くは蔵王連峰まで見渡すことができ、見張り場としての立地環境にうなづける。

⑧ 湯元小屋館（馬場秋保氏）

秋保町湯元字鹿乙

※私用のため許可がなければ入れないので注意！

天守閣自然公園の東端部、オートキャンプ場の南にそり立つ岩壁の上に位置し、秋保温泉から続く旧二口街道を手に懸下せる場所にある。戦国時代の終わり、湯元地区の守備を任された馬場秋保氏の定重が築いた館で、大倉山の東側、井戸沢を介して侵入する川崎方面への守備をはじめとした東部秋保郷の有事に備えた砦として設置された。

戸谷沢と小森沢の急峻な崖の上で、旧二口街道の岩壁を沿って四方が切り立った断崖で、極めて固い館だったことがわかる。館跡は下からの眺めでは想像できないほど広い平場となつており、東端は秋保温泉地区が一望でき、湧水地や空堀、身の丈ほどの土塁が約30mにわたつて巡らされ、馬場秋保氏の家中や兵が常駐していたものと思われる。

二口街道を見下ろす北側の断崖上には、小さな雷神祠があり、その場所からは境野館の山城である大旗山や東館の森峯山、秋保氏の本拠桶山まで遠望が利き、見張り場としての機能に長け、戦の際には秋保郷の各館が、のろし等で相互に連絡がとれる体制だったことがわかる。

断崖と堀切を組み合わせた固い守り、断崖に立つ雷神祠から秋保郷を見通すと、気分が戦国期の見張り番兵となる。

秋保氏の城館について、「秋保町史」を参考に現地を歩き、まとめてみました。

中世・戦国の世に築かれた秋保氏の城館は、草木が茂り荒れているところもありますが、土塁や空堀が残っており、自然の地形を巧みに活かした防御性重視の中世城館の特徴を備えています。その場に立つとどの城館も鳥瞰の利く絶好の場所に立地して、最上氏や国分氏などからの侵略を危惧し、二口街道の守備と領有支配の拠点となっていたことが分かります。

当時の秋保氏の戦略を想像しつつ、豊かな自然の中で軽く一汗流しながら、そこかしこに城跡の面影残る里山めぐりはいかがでしょう。

秋保

秋保氏の城館

企画・発行：秋保地域資源活用委員会・仙台市
連絡先：秋保総合支所総務課（022-399-2111）
秋保市民センター（022-399-2316）

掲載されている情報は、令和6年3月現在のものです。

